

序

「だが、いまから五十年前も前、人体を生きたままで、その断面図が撮れる時代がくると予測していましたが。夢想だにできなかったのではないのでしょうか。でも、一人だけいたんですね、それが高橋君だった。どうすれば人体の断面を、死体を輪切りにするのではなく、生体のまま患者になんの苦痛も与えず、撮影することができるだろうか、その方法はないか？ そのことを考えつづけてきた人間、それが高橋君だったのです」と、その生涯を通じて高橋信次が兄事することを惜しまなかった松永藤雄さん（都立駒込病院名誉院長）はいう。

ここに『DAME』（昭和五十九年九月号）という雑誌がある。その中にノンフィクション作家の山根一真氏が書いた、高橋信次に関する記事が六ページにわたって載っている。

《世界で初めて人体の断面写真を撮り、CTスキャナーの先駆者となった偉大な医学者》の見出し。

その文中には「高橋はすでに昭和二十四年、弘前大学で輪切り像の撮影に成功している。(略)骨のきれいな断面写真もある。CTにさきがけること二十数年前、こんな見事な写真が撮られていたことに息をのんだ」と書いてある。

二十世紀最大の医学発明といわれ、人類にはかりしれない福音をもたらし、いまや世界の医療界の寵児となっているX線CTが出現したあと、「そういえばむかし、人体の輪切り像の撮影に成功した、日本人がいたじゃないか」と、ふり返って評価されたのが、高橋信次その人なのである。

美しい城下町の、二本松市街を一望する丘の中腹。背後になだらかなスロープの雑木林を配して、簡素な墓がある。

まだ石に刻んだ文字あとも、それほど古びてはいない。

顕徳院殿法彰日信居士

これが高橋信次の法名である。だが、その墓には「高橋信次の墓」としか刻まれていない。いかにも飾らない人柄だった生前の墓の主にふさわしいたたずまいである。

いま、高橋信次を、医学者として功成り名遂げた幸福な人だった、と呼ぶ人は多い。

「信次兄は、学士院会員になれたことを、学者冥利につきる最高の栄誉だと、よろこんでいました」と、実弟の菅野宏吉さんは語る。

学究のこと以外は、なにごとくも高望みをするような人品ではなかったのだろう。きっと文化勲章などは、学究人生のほんのおまけぐらいに考えていたのかもしれない。

また、そのいっぽうで高橋信次を、不運な人だった、と同情し慷慨する人もいる。

《高橋の開発した原理と技術は、「高橋トモグラフィ」と呼ばれ、世界的評価を得ている。CTスキャナーのCTはコンピュータライズド・トモグラフィの略で、CTスキャナーは、高橋トモグラフィにコンピュータを結びつけたものだという人がいる。「高橋トモグラフィにコンピュータを結びつけただけでノーベル賞を受け、原理を発明した人にノーベル賞が授けられないのはおかしい」と憤慨する人も多い》(和田努『大学医学部・その人脈と名医たち』一九八六年、日新報道刊)

もつとも《それは周囲が勝手にやきもきすることで、ご本人は迷惑な話かもしれない。高橋自身は、そんな瑣事にこだわらない超然たる性格の人だからだ》と、著者は書いておられる。

なかには「高橋信次は二度、ノーベル賞を逃した」という人さえいる。一度目は一九七九年、X線CTの開発者G・N・ハンスフィールドと、数学的にCTの概念を証明し、その成立を予言したA・M・コーマック博士が、ノーベル医学・生理学賞をとにももらったとき。

「コーマックがもらえるなら、とうぜん高橋信次にも資格があった」というのだ。そして、二度目は一九八五年、高橋信次がもしも他界しなかったなら、その年のノーベル賞にはおそらく、高橋信次のもう一つの独創的な業績である「原体照射法の研究」によって、こんどこそ受賞者に選ばれたはずであったという。

「原体照射法」は、高橋トモグラフィと呼ばれた「回転横断撮影法」などとともに、高橋信次の『X線による回転撮影法の研究』という巨大山脈のなかの高峰の一つであるが、しかし、なんといつても最高峰は「回転横断」であり、その断層撮影画像は、ある時期まちがいに世界のトップに位置づけられていた。

たとえば昭和四十四年十月、東京で開かれた第十二回国際放射線医学会議のため来日したドイツのシュプリ

ンガー社々長、ゴーチエ博士が、わざわざ会議のあと名古屋を訪れ、胃がん手術後の血清肝炎で会議の副会長に選ばれながら、一度も上京できなかった高橋を病床に見舞ったとき、高橋がシユプリンガー社から出してもらった『回転横断撮影図譜ならびにその臨床応用』の礼を丁寧にのべると、ゴーチエ社長は「いや、それはドクター高橋が、断層撮影では世界のトップだということを私どもが知っていたからです」

そういつてあべこべに高橋の長年の偉大な研究を讃えたというエピソードからも、世界の放射線医学界における高橋信次のポジションがわかってもらえるのではないだろうか。

そして前述したように、このときから三年後の一九七二年、ハンスフィールドが開発したX線CTが、世界の耳目を奪って登場したのである。

そのCTを「高橋トモグラフィにコンピュータを結びつけただけのもの」という人もいるけれど、そのコンピュータすら当時、わが国ではまだ輸入が許されていない時代だったのである。敗戦国の悲しさであった。

いずれにせよ、X線CTが出現してから、高橋信次の評価が内外でいつそう高まったことは事実である。なにしろ二十世紀最大の医学発明と言われるCTより二十数年前に、動物実験段階のCTよりもきれいな人体の横断面画像を撮っていたのだから。

それも敗戦直後の、みちのく青森県の片隅で、餓えと酷寒とに苦しみながら、しかし、多くの友情ある理解と門下生たちの献身に支えられて、その『X線による回転撮影法の研究』は始まったのだった。

青森市のはずれの老巧官舎での共同生活。レントゲンの機械がたった二台しかなかった新設の医科大学。電力事情がわるく停電ばかりしていた町の小さな鉄工所での模型づくり。丈余の積雪のなか四キロの山道を通い

続けた西平内結核療養所での診察と研究。

ここに高橋信次の絶筆となった八ガキがある。昭和六十年二月二日（死の二カ月前）、愛知県がんセンターの病床から、松永藤雄宛に出したものだ。

《略》先生の八日の会には八是非出席したいものです。その節はどうぞよろしくお願い申し上げます。大腸の状況八段々よい様ですが、どうも食欲がトンとなないので、毎日痩せる一方で、どうも最近はやアイトがなくて困りました。しかし、上京の際皆様にお眼にかかれるの八楽しみです。（略）

文中の八日の会というのは、松永藤雄の喜寿の祝いのことである。

また、大腸の状況は云々と書いてあるが、高橋のいのちを奪った病名は、胃がんから十六年後の重複がんであり、原発性の膵臓がんであった。とても上京できる容態ではなかったが、高橋は歌子夫人に支えられて、東京の祝賀会場に現われた。そして、病人とは思えない力強い声で祝辞をのべたのである。

「私は弘前で松永先生に大いに教育されたことが、よかったのだと、今になって思い返しております。私は曰ごろ若い人にもよくいつていることですが、仕事をするなら努力する価値のあるものを選び、そして方向を正しくとりなさい。そして出来るだけ、国際的にわかってもらうように努めなさい。でも、これらの言葉は戦後まもない頃、松永先生、あなたから教えられた言葉でした。人間の努力する量など、実際には限られているわけですから、方向を見誤らないこと。けっしてムダに時間を使わないことが大切なのです。いずれにしても、私はいろんな方からよくして頂いて、ほんとうに有難かったです。歳をとると、いちばん張り切っていた時代が、最も懐かしく憶い出されます。松永先生、ほんとうに永いあいだ有難うございました」

このあと高橋は、あらかじめ用意しておいたホテルの部屋に運ばれ、ベッドに倒れ込んでしまったという。

「高橋君も若かったですが、あのころが日本の放射線医学の、まさに青春時代だったのでしょね。貧しく悩みも多かったけれど、夢もいっぱいあった」

と、松永藤雄さんはいま感慨をこめておっしゃる。